

ナンゴクヒメミソハギは関東地方に生育するのか？

ふじのくに地球環境ミュージアム 准教授

早川 宗志



『植調』57卷12号で述べたように、著者はミソハギ科ホソバヒメミソハギの果実ゴール（虫こぶ）の中に生育するチビゾウムシ類を確認して以来、ミソハギ科ヒメミソハギ属に興味を持っている（早川2024a）。本稿では、さく葉標本の調査から明らかになった同属のナンゴクヒメミソハギの関東地方における分布状況について紹介したい。

なぜ、帰化植物のナンゴクヒメミソハギを調査対象種に選んだかというと、著者が関東地方で見たことが無い水田雑草だったからである。水田雑草研究者5名ほどにも聞いてみたものの、誰も関東地方におけるナンゴクヒメミソハギの確実な産地を知らなかった。しかしながら、関東地方の各県の植物誌や目録等にはナンゴクヒメミソハギが掲載されていた。このような状況のため、ナンゴクヒメミソハギの関東地方における分布実態を不思議に感じていた。

そんな時、埼玉県鴻巣市の水田において、ナンゴクヒメミソハギの様な長い花柄をもつ集団を見つけたが、この集団はゲノム量や他の形態的特徴からホソバヒメミソハギであると結論付けることになった（早川ら2018；早川2024a）。この著者自身の経験が基となり、ナンゴクヒメミソハギは近縁種ホソバヒメミソハギと形態的な識別点が初見では見誤りやすいことから、「関東地方から採集されたナンゴクヒメミソハギの同定は本当に正しいのか？」という疑問を持つこととなったのだ。

そこで、計19の植物標本庫における調査から、日本国内の分布東限である関東地方におけるナンゴクヒメミソハギの分布情報の精査を行った（早川2024b）。すると、関東地方産のナンゴクヒメミソハギとされていた標本の計48点は誤同定であり、正しくはホソバヒメミソハギもしくはヒメミソハギ、シマミソハギ、アメリカキカシグサなどであった（図-1A-D）。唯一、平塚市博物館（HCM）に所蔵されていた神奈川県産の1点のみがナンゴクヒメミソハギであった（図-1E）。このため、ナンゴクヒメミソハギは標本作製で採集されるほど高頻度では関東地方に分布していないと推察される。

『植調』54卷9号において、森田（2020）は「県単位の

植物誌やWeb上の植物を扱った最近の記事などを参照すると、ナンゴクヒメミソハギはすでに関東地方北部までの水田に発生しているようだ」と記述している。しかし、上記の状況から、これらの中には誤同定に基づく情報が含まれていたと判断できる。この結果は、帰化雑草の地域的な初帰化年や現在の分布情報を取り扱う上で、一次資料かつ再検証可能な収蔵庫に所蔵されるさく葉標本を参照することの重要性を示している。また、類似した形態を持つ近縁種が存在する場合、藤井（2019）が指摘しているように、標本データのユーザーは公開データの信頼性や特性についてよく理解した上で利用することが望まれる。

最後になってしまったが、ナンゴクヒメミソハギの形態的な識別点について、紹介したい。北アメリカ原産のナンゴクヒメミソハギ（別名：アメリカミソハギ）は一年生の水田雑草である。ホソバヒメミソハギ（n=33）はナンゴクヒメミソハギ（n=15, 16）と *A. robusta* Heer & Regel（n=17）の種間雑種の倍数化によって形成された複二倍体起源の種である（Graham 1979）。両種は形態的に類似するが、その明瞭な識別形質はナンゴクヒメミソハギの花柄（3-10 mm）と小花柄（2-5 mm）がホソバヒメミソハギ（花柄0-3mm、小花柄ほぼ0 mm）よりも長いことである（近田2003）。ホソバヒメミソハギは、片親のナンゴクヒメミソハギと遺伝的に半分が同じであることから、形態的な類似度が非常に高い。結果として、ナンゴクヒメミソハギの分布がないもしくは低密度である地域では、同属近縁種をナンゴクヒメミソハギと誤同定し易いことから、注意が必要である。

謝辞

標本調査を許可いただいた ACM, BIWA, CBM, GMNHJ, HCM, INM, KYO, KPM, MAK, OSA, SCM, SMNH, THS, TI, TMNH, TNS, TOCH, YCM とその収蔵庫スタッフに感謝します。本研究の一部は、日本雑草学会研究課題補助事業 No. 2002 および JSPS 科研費 23K00967 の助成を受けた。



図-1 関東地方産のナンゴクヒメミソハギと同定されていた標本。

A: ホソバヒメミソハギ (成島明・丸山友一 s.n., 2014年9月21日, INM-2-086802, 伊藤彩乃撮影), B: ヒメミソハギ (天野誠・斎木健一 s.n., 2008年9月30日, CBM265589), C: シマミソハギ (天野誠ら s.n., 2008年11月29日, CBM269500), D: アメリカキカシグサ (平田和弘 s.n., 2004年9月9日, CBM269650), E: ナンゴクヒメミソハギ (金井和子 KN1-141005, 2014年10月17日, HCM)。

参考文献

- 藤井伸二 2019. 公開標本データの信頼性に関する検討事例：マメダオシ（ヒルガオ科）. 日本国態学会誌 69, 127–131.
- Graham, A.S. 1979. The origin of *Ammannia × coccinea* Rottboell. Taxon 28, 169–178.
- 早川宗志 2024a. 水田雑草ホソバヒメミソハギの気になる形態. 植調 57 (12), 14–15.
- 早川宗志 2024b. さく葉標本に基づくナンゴクヒメミソハギ（ミソハ

ギ科）の関東地方における分布情報の精査. 雜草研究 69, 41–44.

早川宗志ら 2018. 水田雑草ホソバヒメミソハギ（ミソハギ科）の形態変異と帰化年代について. 徳島県立博物館研究報告 (28), 107–110.

近田文弘 2003. ミソハギ科. 清水建美編著「日本の帰化植物」平凡社, 東京, pp. 142–143.

森田弘彦 2020. 水田雑草の「ヒメミソハギ類」に加える、古参の帰化種シマミソハギ. 植調 54(9), 18–19.